

パスカルの神の存在証明

— 『パンセ』既分類断章の分析より—

児玉 正幸*

Pascal's Argument of the Existence of God

— Through an Analysis of *Papers Classified by Pascal in Pensées* —

Masayuki KODAMA*

Abstract

Pascal criticized some arguments of the existence of God. In this paper I intend to clarify the framework of Pascal's own thesis through an analysis of *Papers Classified by Pascal in Pensées*, which testifies the truth of Christianity.

(1) Pascal rejected some arguments of the existence of God: for instance, the cosmological argument, the theological argument, and the theory that God should be postulated as the Creator of eternal truth.

(2) It was by seeing history through the eyes of faith that Pascal intended to demonstrate the existence of God. Therefore, his own thesis is termed Pascal's philosophical argument of the historical existence of God.

KEY WORDS : *Pascal, argument of the existence of God,*

はじめに

本稿では、パスカルの神の存在証明の方法に焦点を当てる。パスカルは既成の神の存在証明を批判した。キリスト教弁証論たる『パンセ』既分類断章の全体構成を分析することによって、パスカル自身の神の存在証明の特徴を鮮明にすることが、本稿の目的である。

一 既成の神の存在証明とパスカルの宇宙（物理的空間）との関係

周知のように、『省察』第三や『方法序説』には、

デカルト自身による神の存在証明が展開されている。そこに見られる神の存在証明は、三大別できる。一つは、「完全性の生得観念」の原因として神を要請する、人性論的証明である。他は、「永遠の真理」（自然法則、数の比例関係、幾何学の諸真理、等）を含む森羅万象が、神の連続的創造の業なくしては一瞬たりとも存続し得ないとする、神の連続的創造説である。残る一つは、「完全な存在」という神観念の内に既に実在が含まれているとする、存在論的（本体論的、本質論的）証明である。以上の神の三大証明を私たちはデカルトの上記著作中に確認することができる。

また、神の宇宙論的（自然神学的）証明方法に

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

関しては、デカルトの宇宙生成論の中に私たちはそれを確認することができる。それというのも、デカルトは物質の運動原因として神をもちだしているからである。デカルトの宇宙生成論における二大仮説は、次の次第であった。

神は初めに、無際限の物理的空間（即ち、物質的世界）を創造した。次に神は、空間の海に一点の隙間無く充滿する物質（その本質は幾何学的延長）を弾いて、それに運動を賦与した。すると、宇宙空間に渦動が発生した（『世界論または光論』 AT XI, 『方法序説』第五部 AT VI, 『哲学の原理』第三部 AT IX）。

「神は運動の第一原因であり、宇宙において常に等しい運動量を保存している」（『哲学の原理』第二部第三六節 AT IX）。そのようにデカルトが明言している以上は、物質の因果の連鎖の果てに控える第一原因としての神は、パスカルにとっては、宇宙論的証明の対象となる神に他ならなかった。

「この無限の空間の永遠の沈黙が、私をおののかす」（L201-B206）、というパスカルの物理的空間では、デカルトが採択したとパスカルの考える、神の宇宙論的証明（『哲学の原理』第二部 AT IX）が峻拒されている。イエス・キリストへの通路たる「心情の秩序」にも通暁した信仰の人、パスカルにとって、ユークリッドに代表される「精神の秩序」を過信する近代的知性人が自然の第一原因として導出する機械仕掛の神（Deus ex machina）は、人間の靈魂の救済には全く無益な、単なる「理性の真理」に他ならなかった。パスカルの「生ける神」は「哲学者や学者の神」（『メモリアル』 BR IV）ではなかった。「形而上学的原理としての神」ではなく、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、——愛と慰めの神」（L449-B556）こそ、パスカルの「生ける神」だったのである。人間の靈魂の救済につながる「信仰の真理」に触れない、哲学者や学者による神の存在証明は、パスカルには全く無価値な代物だったのである（1）。

パスカルの物理的空間では、自然界の合目的性や美から神の存在を帰結する目的論的証明（デカルトも機械論的量的自然観に立つ以上、これを不採用）も成立しなくなっている。それと言うのも、

一見敬虔の極みに見える神の目的論的証明は、自然界に不測の神の意志を忖度する点において、神にとっては巔頂の引き倒しになっているからである。自然界に全能の神の意志を推し測る態度は、被造物の分限を越えた不遜の極みに他ならない。

西洋中世に主流を占めた神の目的論的証明の根底には、中世人通有の目的論的質的自然観があった。目的論的質的自然観とは、形相 (eidos) と質料 (hyle) の関係から自然を説明するアリストテレス以来の形質的自然観を下敷にした、中世スコラ哲学の実体形相的自然観のことである。中世スコラ哲学の実体形相的自然観とは、感覺的性質の客体的実在性を主張する他に、物体の運動は全て、自然的事物に内在する実体形相 (forma substantialis) (実在の性質) に起因する、とする立場である。例えば、色や味といった感覺的性質は、自然的事物に内在する固有の客体的性質に他ならなかった。また、物体の落下運動とは、その物体に内在する実体形相 (実在の性質) たる重さを原因として、物体が本来の場所に向かって、初期の目的を達成する過程に他ならなかった。その意味からして、中世スコラ哲学の実体形相的自然観とは、目的論的質的自然観と呼び換えることができるのである。

目的論的質的自然観の以上の特質に注目すれば、「運動と形状」を基本原理にして全自然を説明しようとするデカルトやパスカルの自然観が機械論的量的自然観と呼称されるのは、実に言い得て妙である。「この無限の空間の永遠の沈黙が、私をおののかす」（*ibid.*）、というパスカルの物理的空間に、創造主の目的を見いだそうとする事自体が徒勞なのである。却って、自然界を永遠に沈黙する無機的世界と看做して、中間者としての自己存在の自覚から自然発生する恐れとおののきの内に、無限の空間に生起する事象を機械論的に観察記述し、実験する態度の方が、全能の「隠れた神」(Deus absconditus) に対して敬虔だと、パスカルは考える。

また、「永遠の真理」(自然法則、数の比例関係、幾何学の諸真理、等) の創造者としての神の要請も、パスカルの物理的空間には無縁になっている

のが、次の断章から知られる。

そういうわけで、私はここでは、自然的な理由によって、神の存在、三位一体、靈魂の不死、その他この種の事柄を、証明しようと企てはしないであろう。それはただ単に、頑迷な無神論者たちを説得するに足るものを、自然の内に見いだすだけの力が、私にはないと思うからだけではない。それだけではなく、むしろ、そのようなものを見いだすこと自体が、イエス・キリストなしには、無益であり不毛だという理由からでもある。例えば、数の比例関係は非物質的永遠的な諸真理である。それらの諸真理は一つの第一真理に依存しており、その第一真理の中で存続を保っているものである。この一つの第一真理が神と呼ばれるものである。という具合に、或る人が納得させられたとしても、その人が自己自身の救済に向かって大いに前進したとは、私は思わない〔当該の文章は、神の永遠真理創造説に対する、パスカルの批判〕。

キリスト教の神は、単に幾何学の諸真理の創造者、諸元素間の秩序の創造者にすぎないような神ではない (L449-B556)。(下線と〔〕内は、引用者による)。

また、アンセルムスに始まり、デカルトも『方法序説』第四部や「第三省察」(2)、『哲学の原理』第一部(「人間的認識の原理について」)で試みた、神の存在論的(本体論的、本質論的)証明とパスカルの物理的空間との関係は、取り立てて論断するだけの資料が現存していない。

「完全性の生得観念」の原因として神を要請するデカルトの人性論的証明とパスカルの物理的空間との関係に関しても、同断である。しかしながら、ことデカルトの人性論的証明に関しては、パスカルはその手法を自家薬籠中の物にしている。デカルトのその手法をパスカルが換骨奪胎している事態は、『パンセ』第一綴(既分類断章)の中に、私たちは歴然と探り当てることができる。

要するに、デカルトによれば、私たちが自分を不完全と考えるのは「完全性の生得観念」が私たちに内属しているからである。不完全な私たちが

「完全性の生得観念」の原因となるのは不可能であるから、その原因として神は「現実に存在」しなければならない。デカルトがそのように思索したように、パスカルも人間通有の「幸福への本源的願望」に着目して、「幸福の生得観念」の内在から「原初の偉大さ」の痕跡を引き出したのである。つまり、人間はもともと、パラダイスを故郷としていた。人祖アダムとイブがかつてそこから転落したが故に、その子々孫々たる地上の人間はこぞって、存命中は常時、憑かれたように天上の故郷を思慕せざるを得ない羽目に陥った、とパスカルは指摘するのである。

幸福への願いが私たちに残されているのは、私たちが罰するためでもあり、また、私たちがどこから転落したかを感じさせるためでもある(L401-B437)。

そのように人間の実存状況を冷徹に分析、解釈するパスカルにとって、幸福の生得観念を持ちながらも幸福を実感できないでいる現世の人間とは、アダムの原罪故に悲惨にして、幸福の生得観念故に偉大な、人生の逆説を生きる悲劇的な「義なる罪人」(juste pécheurs)なのである(3)。

二 パスカルの神の存在証明

(一) 神の歴史哲学的証明

パスカルによれば、自然的理性には、神の存在も性質も知られることは決してない。自然的理性は空間の無限の存在を知ることが可能であっても、延長をもたない神、即ち「部分をもたない神」については、その存在も性質も知り得ない(L418-B233)、と言うのである。従って、パスカルに言わせれば、自然的理性にとって、「神があるというのも不可思議」、「神がないというのも不可思議」(L809-B230)なのである。神の存否の問題は、理論理性を二律背反に導くことになる。

では、延長をもたない神の存在は、いかにしてパスカルに知られるのであろうか。私たちがその解答を『パンセ』の次の断章に見いだすことができる。

信仰によって、私たちは神の存在を知る。神の性質も、栄光によって、知ることができる (L418-B233)。

神の存在が知られるのは、自然的理性の行使によってではなく、「信仰によって」(par la fois) というわけであるから、私たちが神の存在を知るためには、まず何よりも、「精神の秩序」から「心情の秩序」(「愛の秩序」)への質的飛躍が私たちに対して重要な課題となる。

パスカルによれば、「肉の欲」(concupiscence de la chair)・「眼の欲」(concupiscence des yeux)・「生の驕り」(orgueil de la vie) (L545-B458) が火砕流となって流れ下る地上には、次の三つの秩序が存在する、と言う。

身体から精神への距離の無限は、精神から愛への限りなく一層無限な距離を象徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。

人の世の偉大のあらゆる光輝は、精神の探求に携わる人たちにとっては、光彩を失う。

精神的な人間の偉大は、国王にも、富豪にも、将軍にも、およそこれらの肉体の偉人には誰にも見えはしない。

神から来るのでなければ無価値な知恵の偉大は、肉体的な人間や精神的な人間には見えない。これらは類を異にする三つの秩序である (L308-B793)。

「これら三つの火の河が潤しているというよりは燃え立っている呪われた地上」(L545-B458)にパスカルが確認した、以上の三つの秩序は通常、「身体の秩序」、「精神の秩序」、「心情の秩序」(「愛の秩序」)と呼び習わされている。これら三つの秩序は相互に完結しており、いわば、線分と平面と立体の関係に例えることが可能である。汚濁に満ちた地上におけるパスカルの生活の目標が、「心情の秩序」(超自然的な「愛の秩序」)にあったのは、紛れもない事実である。

ではパスカルは自他ともに、いかなる手段をもって、アルキメデスに象徴される「精神の秩序」からイエス・キリストに象徴される「心情の秩序」(超自然的な「愛の秩序」)へと突き抜けようとするのであろうか。その質的飛躍を可能にするスプ

リング・ボードは、「二つの無限」の存在である。「二つの無限」の指摘は、驕れる人間「理性」(「幾何学的精神」と「繊細の精神」)にとって、躓きの石となる。いわば、それは、如意棒(理性)を持った驕れる孫悟空(「精神の秩序」に留まるアルキメデス的人間)の鼻をへし折る釈迦の掌のようなものであろう。「二つの無限」を前にして、自然的理性は自己の限界を悟り、「心情」(cœur)に道を譲る。自然的理性の知らない理由を知る「心情」(L423-B277)は、傲慢に陥りやすい「理性」を新たに生かして使用するのである。

従って、パスカルによる神の存在証明は、自己の限界と運用に未だ開眼していない驕れる「理性」の立場から行われた既成の諸々の神の存在証明とは歴然と一線を画している。パスカルの神の存在証明とは、パスカルが「心情」の立場に移行して、「信仰の眼で」(par les yeux de la fois)人間の歴史を考察した結果の神の存在証明、即ち、神の歴史哲学的証明に帰着するものと予測される。その神の歴史哲学的証明の土台を形成するパスカルの歴史観を約言すれば、イエス・キリストを回転軸とするキリスト教救済史観である(4)。

そこでその視座から『パンセ』を読み返せば、私たちは確かに、「信仰の眼で」歴史を考察するパスカルの姿を捉えることができる。

信仰の眼でヘロデヤカエサルの歴史を見るのは、素晴らしいことである (L500-B700)

ダリウスとクロス、アレキサンダー、ローマ人、ポンペイウスとヘロデ、彼らが福音の栄光のために、自らそれと自覚せずに行動しているさまを、信仰の眼で見るとは、何と素晴らしいことであろうか (L317-B701)。

所引の二断章からは、神が見えざる巧智を用いて着々と壮大な計画を実現していく歴史過程の発見に、『パンセ』執筆中のパスカルが抑え難い惑溺を覚えていた様子が、ありありと伝わってくる。上記断章から、パスカルがキリスト教の真理を歴史哲学的に証明する意図を抱いていたことが透視できよう。

パスカルにキリスト教救済史観を確信させた確かな手答えは、パスカルの姪のマルグリットの身

の上に起きた教会公認の聖荊の奇跡（一六五六年三月二四日）であった。それに関心を抱いたルアネ嬢に対してパスカルの発信した書簡（第四信）には、「隠れた神の秘義」即ち「奇跡」という神の歴史的顕現に関する、パスカルの見解が如実に発露している（5）。

以上の、キリスト教の真理を歴史哲学的に証明しようとするパスカルの意図を裏書きするのが、実は、キリスト教弁証論たる『パンセ』既分類断章の全体構成である。以下、その全体構成を分析することによって、パスカルの意図する神の存在証明がまさしく、神の歴史哲学的証明に他ならない事態を確認する。

（二）『パンセ』既分類断章の全体構成の分析から導出される神の歴史哲学的証明

『パンセ』既分類断章の前半部は人間学である。ここでは、パスカルは人間学的考察により、「本性それ自身によって、本性が腐敗していること」を明らかにして、「神なき人間の悲惨」（L6-B60）を述べる。次に、彼は人間性の孕む自己矛盾を明快に説明する原理の探求に移り、キリスト教の存在を示唆する。キリスト教は理論理性に納得のいく説明を与え、実践理性には最高善たる幸福を約束してくれる、とパスカルは指摘する（L12-B187）。現状分析から、キリスト教を人間の総合的要求を充足する教えとして、しかも検証可能な科学的仮説として、パスカルは提示するのである。事実立脚する実験科学の手法を用いて立てられたその科学的仮説の真理性を、歴史的眞実に即して検証するのが、次の『パンセ』既分類断章後半部である。

ところが、歴史哲学の問題を扱う後半部に移行する前に、『パンセ』の理知的読者は「二つの無限」と「賭」（L418-B233）に直面させられる。

自然的理性が第一原理（premières principes）（「時間」、「空間」、「運動」、「数」）の中で逢着する「二つの無限」の存在は、「自然の最大の驚異」（les plus grandes merveilles de la nature）（BR IX）である。私たちは、心身両面で「無限」（infini）

と「虚無」（néant）の間に浮遊する人間存在（靈魂 âme と身体 corps から成る）に驚嘆する。その結果、私たちはパスカル（6）同様、人間を二つの無限の間に引き裂かれた中間者だと規定する。自己を無限に越えるものを前にして、私たちの自然的理性は自己の限界を自覚する。こうして私たち『パンセ』の読者は、エピクテートの独断とモンテーニュの怠惰の夢から覚めて、神を呻きながら捜し求める（chercher en gémissant）精神状態に移行する。

次に、私たちは神の存否を巡る究極の実存的選択を強いられることになる。神の存否を巡る賭は二者択一の人生不可避の賭である。この賭には態度の保留は許されない。この賭事に傍観者を決め込む態度は取りも直さず、神の非存在に賭けた行為になる。神を「捜し求める無神論者」（les athées qui cherchent）（L156-B190）は既に、船に乗り込んでしまっている（embarqués）（L418-B233）という、人間の条件を自覚した「義なる罪人」（juste pécheurs）なのである。「義なる罪人」とは、「選び抜かれた者」（élus）と「見捨てられた者」（réprouvés）が一体となり、天使と野獣が一体となった人たちの総称である。彼らの抱く人間観（7）では、「神」と「虚無」の両極の中間に位置する人間は、俗世に首までどっぷり浸かりながらも、逆説的に「臨在」（présence）すると同時に「不在」（absence）でもある「隠れた神」（Dieu caché）の探索を決してあだやおろそかにすることのできない悲劇的存在に他ならない。

「二つの無限」と「賭」に直面して回心（心が神に向かうこと）が訪れ、呻吟しながら神を捜し求める段階を迎えた『パンセ』の読者は、キリスト教の真理を歴史哲学的に証明する既分類断章後半部に自然にいざなわれる。

後半部では、パスカルは「聖書によって、救済者が存在すること」を明らかにして、「神をもつ人間の幸福」（L6-B60）を述べる。その際に彼は、その仮説の真理性を歴史的眞実に即して検証するのである。その場合、パスカルは理論理性の立場から「心情」の立場へ移行し、「信仰の眼で」人間の歴史的運命を考察している。

キリスト教弁証論たる『パンセ』という森厳な思索の森を、チルチルミチルさながら歩む私たち読者は、二段階の質的弁証法を経て、パスカルによる神の歴史哲学的証明に逢着するのである。

引用略号

- L : Blaise PASCAL, *Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets*. Introduction de Louis LAFUMA, 3vol., Paris, Édition du Luxembourg, 1952.
- B : *Pensées*, vol. Tomes XII — XIV des *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection <Les Grands Écrivains de la France>, 1904.
- BR : *Œuvres de Blaise PASCAL*, par Léon BRUNSCHVIG, Paris, Hachette, Collection <Les Grands Écrivains de la France>, 1904 sq.
- 『パンセ』からの引用は、上掲ラフユマ編『パンセ』(通称ラフユマ第2型, 略号L)に依拠する。略号の次のアラビア数字は『パンセ』の断章番号を示す。『パンセ』以外のパスカルの著作からの引用は、上掲ブランシュヴィック編パスカル全集(フランス大作家双書版)(略号BR)に依る。
- AT : *Œuvres de DESCARTES*, publiées par Ch. ADAM et P. TANNERY, 13vol., Nouvelle présentation, Paris, Vrin, 1964 sq.

註

- (1) 拙論「パスカルのデカルト弾劾について—デカルトはなぜ、〈無益にして不確実〉か—」(『鹿屋体育大学学術研究紀要第11号』, 1994年, pp. 159-164), 参照。
 - (2) 『省察』初版(一六四一)の表題は『神の存在と靈魂(精神)の不死とを証明する第一哲学についての省察云々』(*Meditationes de prima philosophia, in qua Dei existentia et animae immortalitas demonstratur*. ---.)であった。ところが、翌年刊行の第二版では、本書の内容に忠実に即して、表題が次のように改正された。『神の存在を証明し、そして人間
- 靈魂(精神)と身体との区別を証明する、第一哲学についての省察云々』(*Meditationes de prima philosophia, in quibus Dei existentia, et animae humanae a corpore distinctio, demonstratur*. ---.) (*Med, AT VII*)
 - 神の存在論的証明の肯定派がアンセルムス・デカルト・スピノザ・ライプニッツ・ヘーゲルであるのに対して、反対派はトマス・ガッサンデイ・カント。
 - (3) 拙著『パスカルの人間観—天使でもなければ、野獣でもない—』行路社, 1992年, 第二部第一章・第二章, 参照。
 - (4) その概要については、上掲拙著第一部第四章, 参照。
- イエス・キリストによる神—私たちは、イエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者を抜きにしては、神との交わりは全て断たれる。イエス・キリストによって、私たちは神を知る。イエス・キリストなしに神を知り、神を証明すると主張した人たちは全て、無力な証拠しかもっていなかった。それに反して、私たちは、イエス・キリストの証明として、堅固で明白な幾多の預言をもっている。そして、これらの預言は成就し、成就したことによってそれは真実であったと証明されたのであるから、これらの真実性の確かさは明らかになったのであり、従って、そうした預言はイエス・キリストの神性の証拠となるものである。それ故、イエス・キリストのうちに、イエス・キリストによって、私たちは神を知る(L189-B547)。
- (5) 奇跡という形で神が稀に自然の秘奥から出てくるのは、私たちの信仰心を高めるためである。奇跡は頻繁に生じるものでもなければ、全く発生しないものでもない。奇跡がたびたび生じるようでは、信仰は無価値になる。反対に奇跡が全く起こらないようでは、信仰はすたれてしまう。隠れた神は、神に仕える人たちの前に、稀に自らを隠す帳を上げて現れる。隠れた神はかつて、人類救済のために、最大の奇跡を起こした。即ち、自然の帳の下

に隠れていた神は、人間の姿で現れ(ご托身)、降臨の日まで聖体の中にとどまることを選んだ。聖ヨハネが『黙示録』の中で、「隠されているマナ」(二・一七)と呼ぶのはこの聖体の秘跡のことであり、「まことに、あなたはご自身を隠しておられる神である」(「イザヤ書」四五・一五)と言ったイザヤは、聖体中に神を見ていたのである。この最大の奇跡は神の明確な発現の段階であるにもかかわらず、えてして人間の認識は逆行する。それ故、不信の徒は、自然の内にとどまり、自然の創造主に想い到らない。ユダヤ人は旧約聖書の字義的解釈に留まり、イエス・キリストを人間としか見做さない。他方、イエス・キリストが神人であることを知る新教徒といえども、パンとぶどう酒の外観を見ながらそれらの形色の下にいます神を知らない。そこにまで神の光が届いているのは、私たちカトリック教徒のみである。(BR, t. VI, 1914, pp. 87-90. の概要)
(上掲拙著第一部第四章既出)

de Minuit, 1956, pp. 120-3.

上掲拙著第三部。

- (6) それというのも、そもそも人間(l'homme)は、自然のうちにおいて何者なのであろうか。無限(infini)に対比すれば虚無(néant)、虚無に対比すれば全体、無(rien)と全体(tout)との中間者。両極を理解することからは無限に隔てられているので、事物の果てと始まり(la fin des choses et leurs principes)は、彼には底知れぬ神秘のうちに詮方なく隠されている。彼は自分がそこから引き出されてきた虚無も、そこへ呑み込まれてゆく無限も、いずれも見ることができない。(L199-B72)
- (7) 「義なる罪人」の抱く悲劇的逆説の人間観について初めて慧眼を示したは、思想史家のゴールドマンであった。次の著作を参照。

L. GOLDMANN, *Le dieu caché, étude sur la vision tragique dans les Pensées de Pascal et dans le théâtre de Racine*, Paris, Gallimard, 1955
 ————, *Le pari est-il écrit "pour le libertin" ?* in *Blaise Pascal, l'homme et l'œuvre*, Paris, Éd.